

自殺多発場所での 活動者サミット

—自殺のない社会づくりネットワークを目指して—

資料

主催:自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい

日時:2009年10月24日

場所:日本財団

目次

	ページ
目次	1
進行プログラム	2
連絡事項	3
自殺のない社会づくりネットワーク準備会の活動報告	4
東尋坊のつどい報告書 概要	6
視察結果報告書	
東尋坊（福井県坂井市）	8
三段壁（和歌山県西牟婁郡白浜町）	9
足摺岬（高知県土佐清水市）	10
青木ヶ原樹海（山梨県富士河口湖町、鳴沢村）	11
天ヶ瀬ダム（京都府宇治市）	13
宮ヶ瀬湖（神奈川県愛甲郡愛川町、同郡清川村、相模原市）	14
錦ヶ浦（静岡県熱海市）	15
自治体アンケート結果	16
自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい 構想	18

進行プログラム

- 13時00分～ オープニング挨拶
代表 茂幸雄
- 13時10分～ 自殺のない社会づくりネットワーク準備会の活動報告
事務局長 福山なおみ
- 13時20分～ ゲートキーパーの語り合い
- ＜パネリスト＞
茂 幸雄（NPO法人 心に響く文集・編集局理事長）
藤藪 庸一（NPO法人 白浜レスキューネットワーク理事長）
日原和美（富士河口湖町役場福祉推進課長）
藤田真宏（Man to Man G.com（株） 営業企画次長）
佐藤洋司
- ＜進行役＞
佐藤 修（コミュニティケア活動支援センター事務局長）
- 15時00分～ 休憩
- 15時20分～ 参加者の語り合い
自由に発言いただけます。パネリストへの質問も歓迎です。
（但し、時間の関係上5分以内でお願い致します。）
- 16時30分～ ネットワーク構想 発表
事務局長 福山なおみ
- 16時40分～ クロージング挨拶
代表 茂幸雄

総合司会：太長根理會子

連絡事項

終了後、報道関係者を対象に簡単な記者会見を行う予定です。

また、自由参加の交流会を予定しています。(会費3000円)

ご希望の方は受付スタッフに申し出ください。

<お願い>

- 携帯電話は必ずマナーモードにし、音が出ないようにして下さい。
- 会場内は禁煙です。喫煙場所は1階の駐車場の横（車椅子の表示付近）にありますので、喫煙される場合は必ずそちらで喫煙して下さい。
- スタッフは名札をつけております。不明点等あればお問合せ下さい。
- 途中での出入りの場合は、周囲の迷惑にならないようお願い致します。
- 終了後、資料に同封されているアンケートへのご協力お願い致します。
- 取材関係者以外の写真などの撮影はご遠慮ください。必要な場合は、スタッフに申し出をし、了解を得ていただくようお願い致します。

自殺のない社会づくりネットワーク準備会の活動報告

準備会の活動報告と 今回のサミットの位置づけ

自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい

2009年10月24日(土)
日本財団

2009年4月25日 設立準備会



「人のつながり」と「支えあい」という 基本理念に基づく3つのサブシステム

- ネットワーク 自殺防止活動に取り組むネットワーク
- ゲートキーパー ネットワーク 自殺を考えたことのある人たちが体験を語り合いながら、それぞれが前に進むためのネットワーク
- シェルター ネットワーク 自殺を考えたことのある人たちの生活と自立と一緒に取り組むネットワーク

3

準備会の活動報告

- ・東尋坊の集い
- ・現場視察と関係者との交流
- ・自治体アンケート調査
- ・ネットワーク交流会

東尋坊の集い

- ・日時: 2009年7月31日～8月1日
- ・参加人数: 総勢36名(内、体験者16名)
* 精神科医(1名)看護師(3名)

<目的>

- 自殺企図者のエンパワーの支援
- 自殺企図者による体験交流プログラムモデルの構築
- 自殺体験者からの社会へのメッセージ発信

夏のつどい風景



現場視察と関係者との交流

- ・東尋坊 (福井県)
- ・三段壁 (和歌山県)
- ・足摺岬 (高知県土佐清水市)
- ・天ヶ瀬ダム (京都府宇治市)
- ・宮ヶ瀬湖 (神奈川県相模原市)
- ・青樹が原樹海(山梨県富士河口湖町)
- ・錦ヶ浦 (静岡県熱海市)

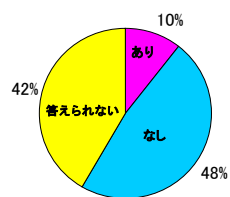
自治体アンケート

対象: 47都道府県18政令指定都市

- ・自殺多発地点の民間団体
- ・「多発地点」に有効な自殺防止対策手段
- ・行政から寄せられた声
- ・各自治体の自殺予防対策

自殺多発地点の認識

対象：47都道府県18政令指定都市



回収率72.3%

県のみ:80.9%、政令指定都市のみ:50.0%

これまでの活動

・交流会



2009年「第1回夏のつどい」 in 東尋坊報告

全国で初めての「自殺を考えたことのある人、試みたことのある人」たちの交流会『夏のつどい』を開催した。

日時：7月31日（金）～8月1日（土）

開催場所：六呂師高原（福井県勝山市）

参加者：総勢36名（内、体験者16名）

自殺を防止するには、自殺企図者に対して「止める」「寄り添う」「支える」の3つの支援を行う事により、多くの自殺を食い留める事が出来ると考え、活動しています。しかし、水際で思い留まっても、その後人生を再出発することができるよう本人の回復力を支えることが重要となる。

■今回のつどい開催目的

1. 自殺企図者のエンパワーの支援とそうしたことが継続的に行われるための第一歩づくり
2. 自殺企図者による体験交流の場の運営ノウハウの蓄積（プログラムモデルを構築）
3. 自殺体験者からの社会へのメッセージを集め、社会に発信していく（マスコミ発信）

■プログラム

自己紹介に始まり、昼の自由行動、バーベキュー、絆の会Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、夜の自由行動

■参加者の気持ちを支える

体験者、体験者でないというところの垣根を超えた交流を前提に、日常を過ごすことを目指した。参加者の中には特定の人と個別で話すことはできても、大勢の中に身を置くことを好まない人、フラッシュバックを起こすなど、緊張の高まりから精神的動揺が生じる可能性が予測されるため、開始直後に「個人申告書」を書ける範囲で記載してもらった。プログラムの途中で退座した参加者には、血圧測定や脈拍などの測定をしながら今の気持ちを表出しやすいよう傍で見守り、安心できるよう努め、また身体的にも緊張感のある人には横臥し休息をとることを促した。夜の自由時間には心配だった方たちは自ら参加し、手作りおにぎりをほおぼりながら談笑や、カラオケで歌うなど共に楽しく過ごした。

■参加者の声と今後の課題

- ・ここ何十年もの長い間、大勢の人と輪になって話をした事が無かったが、今回の集いは、自分の若い時の思いが蘇った。また、同じ“自死”まで考えた人との会話は、年齢の差を感じず、何のわだかまりも無く、遠慮なく話ができ終始楽しかった。
- ・見ず知らずの人や知人には絶対に自分の生い立ちなどは話せなかったのに、今回は何故か誰にでも率直に話をすることが出来、胸の中にあった荷物が取り除かれて軽くなった。
- ・これまで専門家に相談した時、いつも「経験者では無いから絶対に自分の気持は理解はできないはずだ」と思い、何時も批判の目を持って話を聞いていたが、今日、悩みは違っていても「体験者との話し合い」であったことからスムーズにお互いの言葉が胸の中に入って行き、何もかもがストレートに聞き入れることが出来た。

- ・ マスコミの人と対等に話ができ、今まで自分の訴えなんかマスコミ(世間の人)は聞き入れてはくれないと思っていたものが、今日は、自分の訴えを大勢の世間の人に訴えている様な感じがして気持ちが晴れた。

- * FDネットワークプログラムの一環であるこのつどいが、気持ちを一步前進することができ、またトレーニングの機会にもなったと考えられ、次回の企画メンバーとして可能な範囲で参加するなど、自信や自尊心の回復に向けたプログラム構築が必要であると思われた。

■社会への提言

- ・ 自殺の多発場所と呼ばれている場所へ行くのは、そこへ行けば自分の悩み事が解決出来ると思って尋ねており、それは、「死への道程」であり、「何か安心出来る場所である」との思いから発動し、安心出来るものが何も無いため「死」を選択していると思われる。
- ・ 全国に、多発場所と言われる場所を「安心できる」場所として創造して欲しい。
- ・ NTTの104番が、相談できる場所をダイレクトに案内する様にすべきである。
- ・ 一人で良いから同伴してくれるケースワーカーが欲しい。

東尋坊 視察結果

(福井県坂井市)

1 現場付近の状況

- ・飛び込み場所は、越前加賀海岸国定公園内にあり、日本海に海拔 25 メートルの断崖が突き出ており、自殺者の大半は柵などの障壁施設のない約 100 メートルの一望できる範囲内の 3 箇所です。年間 20～30 人が岩場から飛び込んでいます。
- ・周囲は約 1.4 キロメートルの遊歩路が松林で囲まれており、所々に約 1.5 メートルの低い柵が数ヶ所設置されているものの、低いため簡単にまたいで岸壁まで行け、全体的に何処からでも飛び込める環境となっています。
- ・年間約 100 万人の観光客で賑わう観光地であるが、保安員の配置が無く、約 37 軒ある土産屋の殆どが出店であるため、午後 5 時ころになるとシャッター街となり、ゴーストタウン化する。
- ・公衆ボックスが 2 機設置されており、そこには無銭者のためにコインやテレホンカードが心ある人によって置かれています。
- ・日没時になると不気味な環境になるが、水銀灯が 8 基設置されているものの、それも危険場所を照らしているため、夜間でも岩場に近づく事ができる。
- ・最終バスは午後 8 時ころである。

2 自殺防止対策

- ・危険場所に水銀灯が設置されているだけで、何の対策も講じられていない。
- ・公衆ボックスが 2 基設置されており、そこには「悩み事相談所」として地元警察署の電話番号が書かれたポスターが貼られている。
- ・近くの寺が設置した「親から貰ったその命・・・」等と書かれている標柱が危険ヶ所に 4 本設置されている。
- ・最近になり、毎週月・水・金の 3 回、地元民によるパトロールが行われるようになったほか、地元警察官による常時巡回が始まった。
- ・地元 NPO が、水際に相談所を設けて、会員 77 人でパトロールなどを行っているのが主力であり、年間 40～50 人の自殺企図者を発見・保護している。

3 考察

- ・年間約 200 人の自殺企図者があの狭い箇所から全国から集まって来ているところから、昼間の保安員配置と、公的機関による相談所の設置、また夜間監視装置の設置などによる夜間対策が喫緊の課題と思われた。

三段壁 視察

(和歌山県西牟婁郡白浜町)

1 現場付近の状況

- ・投身場所とされる岩場は、海上42Mで、落下時に岩に打撃した後に海上に投げ出されることが多く、岩場の少ない場所に比べて致死率は高いようである。
- ・前任の牧師より継承し、NPO白浜レスキューネットワークと呼ばれる、水際での自殺防止活動と、その後の生活及び就労支援を行っている団体がある。
- ・共同生活者との時間を設けたところ、相談を持ちかけられる場面もあり、就労困難の様子は語られる内容から伺われた。
- ・共同生活するアパート（シェルター）の活用基準を設けながらも個別に対応していた。アパートが手狭な場合として、教会の長椅子を利用しベッドにしていた。

2 自殺防止対策

- ・精神保健福祉士は、保護した自殺未遂者の住居先の自治体との連携を取り、自宅まで同伴している。
- ・三段壁入口等に設置されたNPO白浜レスキューにつながる電話BOX前には、「あなたの街のいのちの電話」と書かれた立て札が、また岸壁付近には「三段臨時交番」が設置され、電話がかけられるようになっていた。

3 自治体の担当者談

- ・自殺防止対策のひとつとして「青色照明」についてリサーチと検討をしている。
- ・白浜レスキューと共にパトロールをするなどの活動をしている。

4 考察

- ・自殺防止活動への取り組みは積極的であり、行政が活動を支援しているなどチームワークの良さが伺われた。東尋坊の活動とともにモデル地域として期待される。

足摺岬 視察結果

(高知県土佐清水市)

1 現場付近の状況

- ・飛び込み場所は、四国の最南端の半島に位置する海拔約 60 メートルの岩壁が太平洋側に突き出ている足摺岬灯台付近の約 50 メートル区域内の 3 箇所の岩場から飛び込みが発生している。
- ・入口は、県道に面した 38 番札所の寺を背にして幅員約 2 メートルあるジャングルの中の遊歩路を約 10 分間歩くと灯台に辿り着くが、途中に古びた茶屋一軒と、見晴台、電話ボックス一基があり、一周できる遊歩路には高さ約 1.5 メートルのコンクリート柵が張り巡らされており、自殺者はその柵を潜り抜けて飛び込む。
- ・昼間は観光客やお偏路さんで賑わうが、午後 5 時ころになると観光客は引き上げ、街灯一つ無い不気味な場所に変身する。
- ・最終バスは午後 6:00 ころで、バス亭付近にお土産屋が 4 軒あるだけである。

2 自殺防止対策

- ・遊歩路の周囲が柵で囲まれていた。

3 自治体の担当者談

- ・自殺する時間帯は、夜間は不気味でジャングルの中へは入れないため、日が開けた早朝に発生していると思われる。
- ・ここ 2~30 年前に年間 40 人程の自殺者がいたと聞いているが、当時、『救世軍総長』と呼ばれる牧師さんが「一寸待て」と書かれた看板を数本建てたと聞いているが、数年前にその看板を取り除いたため自殺者が減ったのではとの意見もある。
- ・また、自殺が減った理由として、他県に自殺の名所が公表されているため分散したのではとの意見もある。
- ・飛び込んでも、黒潮にのり和歌山県まで流れて行ったり、岩にからまり発見されないことがある。

4 考察

- ・相当数の自殺志願者が全国から集まり、現場付近を徘徊していると思われたため、日没時間を中心とした約 1 時間のパトロールが必要と思われた。
- ・監視カメラの導入を検討すべきと思われた。
- ・自元民による自殺者が少ないため、該自治体による自殺防止意識が希薄であった。

青木ヶ原樹海 視察報告

(山梨県富士河口湖町、鳴沢村)

1 現場付近の状況

- ・樹海は歩道を一步外れて少し入ると方向がわからなくなり、迷ってしまうことが実感できた。そればかりか夜になって暗くなると歩くことさえできなくなりそうな状況である。
- ・風穴と反対側の樹海には「野鳥の森公園」につながる道があり、その入り口には「命は親から頂いた大切なもの。もう一度静かに両親や兄弟、子供のことを考えてみましょう。一人で悩まず先ず相談して下さい」という看板が立っている。
その文字の下に、連絡先として、富士吉田警察署・自殺防止連絡会の電話番号が書いてあった。電話番号に局外番号の表記はない(携帯電話ではつながらない)。
- ・風穴の入場券販売所から自然歩道に入っていく人は監視できるが、5時で窓口の人もいなくなる。それ以後も道には自由に入っていける。

2 自殺防止対策

- ・夕方、歩道を少し入ったところにボランティアの人が2人立っていて、声かけなどを行っている。
- ・樹海は広大な範囲にわたっているのも物理的な防止策を考えることは難しいこと、また、当地は「世界遺産」登録を目指す観光地であることなどを踏まえて、活動の基本を「イメージアップ」に置き、自殺のイメージをなくし、いのちの元気をもらう場所へという方向でイメージを変えていく戦略をとっている。
- ・20年秋に、遺族の方からの寄付が契機になって、樹海の入り口などを中心に監視カメラを6機設置した。カメラモニターは売店にあり、売店の人が見ている。

○ネットワーク会議

- ・2008年6月、水際での自殺防止活動を強化するため、富士河口湖町長が座長になって、周辺の市町村や地元企業などの18の団体や機関で「いのちをつなぐ青木ヶ原ネットワーク会議」を発足させた。
- ・具体的には、住民ボランティアの育成や地域住民等に対する自殺予防意識の醸成をはかってきた。樹海のイメージアップを図るためのポスターも製作した(200枚)。
- ・そうした活動を踏まえて、本年度は自殺の危険を示すサインや危険に気づいた時の対応方法などを「自殺企図者対応の手引」としてまとめた。これを活用して、さらに取り組みを広げていく予定。
- ・ネットワーク会議のメンバーは、行政関係者だけではなく、交通機関業界、商工会、観光協会、民生委員など、住民も参加している。さらに、ネットワーク会議のもとに、具体的な実践テーマ毎に部会をつくり、実際にこうした活動に取り組んでいる人を中心に、広範囲の住民を巻き込みだしている。将来は、自殺を考えたような当事者まで巻き込みたいと思っている。

○ボランティア養成講座

- ・物理的な防止策の難しさもあって、住民たちに自殺防止への関心を高めてもらい、一人でも多くの人に声をかけ、いち早く発見し、保護していくことを目指している。そのためにボランティア養成講座を行っている。講座には、山梨県全域のみならず、静岡県からも受講者がある。

- ・講座を受けたからといってすぐに何かボランティア活動をしてもらうのも難しいので、仕事とのつながりの中で実際に行動していけるような人たち(タクシー運転手や売店の人たち)を中心に、まずはそれぞれの持ち場で声をかけてもらうことを重視している。
- ・これまでの講座受講者は250人受講すると動機づけのために「受講済証」を発行。併せて「自殺対策リボンバッジ」を渡している。リボンバッジは、みやぎ自殺対策リボン委員会が呼びかけているリボンバッジを基本にして、そこに青木ヶ原を表記、関連した活動に参加した人にも幅広く配布し、意識を涵養している。3600個を作成。
- ・さらに民宿などへの出前研修講座にも取り組む予定。11月に3回開催する予定。

○報道機関との関係

- ・報道が自殺者を呼ぶ誘因となることのないよう、報道関係者との連携も重視している。そのために、新聞などへの情報提供にも心がけ、有用な情報がしっかりと伝わるような記事作りにも協力している。

3 自治体の担当者談

- ・青木ヶ原樹海での自殺は県外者および身元不明者が約9割を占めている。
- ・特にタクシー業界の人たちは積極的で、会社内部でも運転手教育などやってくれるようになってきた。運転手が保護した事例も増えている。
- ・地域の人たちが動き出しているので、行政ももっとやらなければいけないという気運が高まっている。
- ・近隣自治体も、広報紙やCATVなどを使ってPRに協力してくれるようになってきている。防災防犯活動との連携も強まっている。
- ・保護した人からは役場の担当者が事情をよく聞き、話し合っていく中で、戻っていく場所を相談して決めるようにしている。ここにはシェルター施設がないので、行き先を探すのが精一杯である。最初はなかなか本当のことを言ってくれないが、話しているうちに関係者がわかってくるので、本人の了解を得て、先方に連絡し、社会福祉協議会からお金を借りて送り出すようにしている。ただ一方的に送り出すのではなく、送り先の支援関係先に電話などするように心がけている。

4 考察

- ・自殺防止と言うところに限定せずに、地域全体のイメージアップという誰もが共感できるビジョンを掲げて、地域の「おもてなし文化」のようなものを育てる契機になり、地域住民を効果的に巻き込みながら継続的・発展的に取り組んでいる進め方が、活動を広げ持続性を高めている大きな理由ではないかと感じた。
- ・その一方で、こうした活動によって起こってくる問題として保護者をどうするかという問題がある。現在のところ、まだ現地にシェルター施設や支援体制がないため、せっかく保護しても結局はまた来たところに戻ってしまうことになっている。それでは結局、問題を外に追いやるだけのことになりかねない。次の段階として、そうしたことが課題になっていくだろう。

天ヶ瀬ダム 視察結果

(京都府宇治市)

1 現場付近の状況

- ・天ヶ瀬ダムは京都府宇治市にあり、高さ（提高）73メートル、長さ（提頂部）254メートルのアーチ式ダムで、東京ドーム約16杯分（2000万トン）の水を貯める。観光地にもなっており、年間5万人もの観光客が訪れる。すぐ近くに世界文化遺産に指定された平等院や天ヶ瀬森林公園等がある。
- ・平成21年度は、アーチ式の中心部の平成20年12月設置の仮設フェンス（1.8m）を乗り越え、飛び込みが発生している。（平成21年7月）
- ・昨年度までの傾向として、飛び込み時間は昼間の観光客が途切れた時間帯が多い。（平成20年11月以前）

2 自殺防止対策

(天ヶ瀬ダム管理所による資料参考)

整備	対策内容または効果
立ち入り禁止ゲート	17時～翌朝8時まで閉鎖。
監視カメラ	3ヶ所に設置（提体監視用）
間仕切り（進入通路）	ダムを直視できない様にする。
注意喚起看板	監視しているという意思表示。「いのちの電話」の番号を表示
監視小屋	不審者への直接声掛け対応。（見学者の住所、氏名の記入）
花壇・椅子	癒しと憩いの場所として。見学者による不審者への監視効果
記帳ノート	不審者への監視効果。
自動販売機	「いのちの電話」啓発用。
仮設フェンス（工事用）	1.8mあり、危険行為を図る側への侵入防止。
人感センサー	夜間のダム閉鎖時における侵入防止対策。
構内放送	癒しと憩いの音楽効果。（クラシック）
照明	夜間における青色照明。

3 管理事務所の担当者談

- ・監視人・職員は観光客すべての人に声をかける様心がけている。
- ・天ヶ瀬ダムの職員「天ヶ瀬ダムでは投身自殺を起こさせない」という強い意思の下に防止対策に取り組んでいます。

4 考察

天ヶ瀬ダムにおける対策は他では見られないほどの厳重さであった。職員の方達の熱意には私達も刺激を受け、見習うべきものだと感じた。

対策の面ではもちろん、自殺防止意識も高い職員の方の意見を傾聴でき、今回の調査は非常に価値のあるものになったと考える。

宮ヶ瀬湖 視察結果

(神奈川県愛甲郡愛川町、同郡清川村、相模原市)

1 現場付近の状況

- ・飛び込み場所は、湖の北側（相模原市域）にある『虹の大橋』である。
- ・橋には背の高いフェンスが設置されているが、登ることは可能で、一部フェンス上部を乗り越えたかのように変形していた。他、もう一つの「やまびこ大橋」では、フェンスの一部取り換えられており、車ごと突っ込んだ事案がある。
- ・湖は山岳に囲まれており、平日なためか、湖周辺に観光者等の人影は全くない。
- ・建物がある地域は密集しており、終着地点となるバス停もその一帯に存在する。宮ヶ瀬湖に到着する最終バスは、20 時台。

2 自殺防止対策

- ・虹の大橋には、人の背丈以上のフェンスが設置されていた。このフェンスの網目は、一般的なものよりも小さく登りにくい。
- ・虹の大橋の入り口両側に、監視カメラが設置されている。このカメラは、ダム管理事務所で監視。

3 自治体の担当者談

- ・飛び込みは減少していると思われるが、夜間に車で訪れ湖畔の小さな駐車場で練炭自殺を図る自殺者を朝方になって発見し通報するケースがある。
- ・山岳に入り、自殺を試みる者もいる。数ヶ月前、20 時の最終バスで来た女性 2 人が自殺場所を求めて山の中を歩き回るうちにお腹が空いて下山。歩いているところを発見し保護したケースがある。
- ・虹の大橋では、飛び込まないように柵が設置されているが、やまびこ大橋は、車ごと突っ込むケースがある。
- ・湖・山の中、見つけられていない人もいるのではないかと考えている。
- ・宮ヶ瀬湖近くの清川村に存在するキャンプ場内にある崖がから飛び降りるケースもある。
- ・宮ヶ瀬湖では、横浜の方を保護することが多い。
- ・隣接する自治体の多くが、宮ヶ瀬湖を自殺の多い場所として意識していない。
- ・宮ヶ瀬や丹沢など奥地の地域を人口が少ないなどの理由で『ハイリスク地』と呼び対策がすぐにはできないと考えている。
- ・宮ヶ瀬に向かうバスをはじめ、県内のバス 26 路線にて自殺防止対策に関する車内放送を 1 2 月より予定。（予算 40 万程）

4 考察

- ・宮ヶ瀬湖が自殺発生場所となっているという認識は、周辺施設、自治体共にとても希薄であった。自殺者の多くが地元民ではないことが、自殺発生現場としての認識が希薄である一因と思われる。しかし、周辺山岳への入山による自殺や車ごとの飛び込み、車で練炭自殺は後を絶っていない。
- ・虹の大橋においては、フェンスに有刺鉄線を取り付けるなど、対策としてさらに追加できる対策があると思われることがあると感じた。
- ・「年間 10 人程度であるから、他に比べて自殺多発場所ではない」という自治体や周辺地域民の意識を変える必要があると思う。

錦ヶ浦 視察結果

(静岡県熱海市)

1 現場付近の状況

- ・太平洋に面した風光明媚な断崖絶壁の景勝地で国道 135 号線沿い。
- ・遊歩道、散策に整備した断崖（海拔約 50 メートル）で最も飛び込みが多いと思われる展望台には観音様が祀っており、石碑には数十年以上前から飛び降りが多くあった事を窺わせる文脈がある。
- ・展望台、曾ヶ浦大橋共に危険と思われる個所には約 2, 5 メートルの柵(金属製)が設置されており、よじ登って飛び降りるのは困難。
- ・自殺防止の活動をする団体、個人は存在しない様子。

2 自殺防止対策

- ・遊歩道、展望台は金属製の柵(約 1, 5 メートル)があり、危険と思われる所は更に約 1 メートルの先端が尖ったデザインの柵を追加してある。(取付け時期は不明)
- ・曾ヶ浦大橋の柵は内側斜めに 0, 5 メートルほどの折り返しがあり、乗り越えるのは困難である。
- ・曾ヶ浦大橋手前の展望台は金属製の柵で閉鎖してあり立ち入り不可。

3 自治体の担当者談

- ・現在の錦ヶ浦地区は自殺者がほとんど無く自殺多発場所と認識していない。自殺防止のための民間ボランティアも無いと思うとの事。

4 考察

- ・かつては、自殺多発場所として言われていた錦ヶ浦地区は現在自殺が減少しており地域の関心は低下しているようだが、地元観光事業の対策が、相当な効果を上げていると思われる。
- ・伊豆半島全体が観光地で断崖絶壁が多数在り、飛び込む場所は点在していると思われる。(近隣の城ヶ崎海岸、下田、西伊豆等) 海を望む景色のよい断崖絶壁に行政、地元など恒常的な関心維持、警戒、保護体制の整備が望ましいと考える。

自治体アンケート結果

■調査の目的

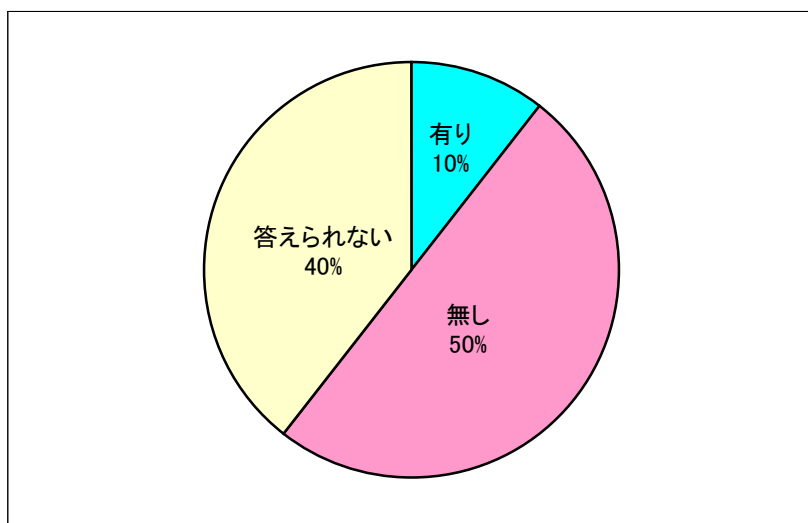
現在、全国には多くの自殺多発場所と言われるところがありますが、場所の特定や各所の自殺防止活動の実態は明らかではありません。そこで今回、全国の地方自治体及び政令指定都市を対象に、自殺多発場所の特定と自殺防止活動の取組状況に関する実態調査を行った。

	都道府県	政令指定都市	合計
対象	47	18	65
回答	39	9	47

回収率 73.8%

(県のみの回収率は 80.9%、政令指定都市のみの回収率は 50.0%)

■多発地点の認識



○答えられない

- ・「特に聞いたことがなく、わからない」…13 自治体
- ・「統計的資料がない」…11 自治体
- ・「『自殺多発地点』と特定することの弊害のほうが大きいと感じる」
- ・「自殺多発地点と具体的に特定できるまで調査を行っていないため」
- ・「自宅、公園など場所での統計までは、把握できているが、多発地点といわれる特定場所かどうかの区別がつかない。」
- ・「自宅、病院が多く、その割合は出ているが、その他の場所については不明。」
- ・「自宅で亡くなる方が多く、特に多発地点はない」

■自殺多発地点の民間団体

自治体により把握されている多発地点の独立民間活動団体は2つ。

(福井県「NPO 心に響く文集・編集局」、和歌山県「NPO 法人白浜レスキューネットワーク」)

青木ヶ原樹海では「いのちをつなぐ青木ヶ原ネットワーク会議」の活動を通して、富士北麓地域の関係行政機関、関係民間団体、観光事業者、交通事業者等が、それぞれの立場から意見を出し合い、共有して自殺対策を展開し、住民ボランティアの養成など行っている。また、環境活動団体などと連携を図りエコツアーやオリエンテーリングの活用を図っている。

■「多発地点」に有効な自殺防止対策手段をどのように考えるか。

(注：現在実際を取っている対策ではなく、自治体担当者が有効だと考えるもの)

- 物理的に企図が不可能となる障壁の設置（転落防止柵、フェンス、鉄道ホームドア等）
- 青色灯の設置
- パトロール（声かけ）やそのための人材育成
- 相談支援機関の情報提供等のポスター、看板
- 全般的な自殺防止対策の継続実施が重要
- 多発地域における要因分析とそれに応じた具体的対策の検討
- 周囲の変化に気づけるようなコミュニティのつながりの強化
- 地域組織の支援体制の構築
- 物理的な対策（遮蔽等）には限界がある
- 人の温かい心理的支援
- 相談支援専門機関や医療機関との連携
- 今後の生活、人生について考えることができるシェルターのような場の提供
- 多発地点の近くに対策拠点を設ける
- 多発地域を自殺とは異なるイメージでPR活動を行なう

■行政から寄せられた声

- ・自殺対策は分野が多岐にわたっており、各分野の人々が顔の見える関係を構築して取り組むことが重要。
- ・報道が自殺の誘因となるケースもあるが、防止への有用な情報も伝えられるので報道の活用方法について検討が必要。
- ・一人の人間に色々な問題が複雑に絡み合って自殺という行為に至る。一機関の窓口だけでは保護後の十分なフォローは出来ない。コーディネーターを中心とした関係機関の連携ネットワークの構築が必要。
- ・住民や民間団体の力を活かして自殺防止が出来るような地域づくりが必要。
- ・行政として自殺対策を進めていく中で、民間団体を含めた各関係機関が連携することの重要性を痛感している。この公開サミットの開催を通じて、みんなで支えあえるネットワークの構築のきっかけになることを願っている。

■各自治体の自殺予防対策

各自治体とも、うつ病対策、普及啓発（講演会、リーフレットなど）、ゲートキーパー養成、自死遺族相談支援、自殺未遂者支援（堺市）、一般医と精神科医の連携モデル、相談支援機関の実務者連絡会議（相談ネットワークの構築）など包括的に実践されている。「多発地点」と認識されている場所が少ないため、対策をとられている自治体は少なかった。

自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい 構想

自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい
構想とこれからの活動

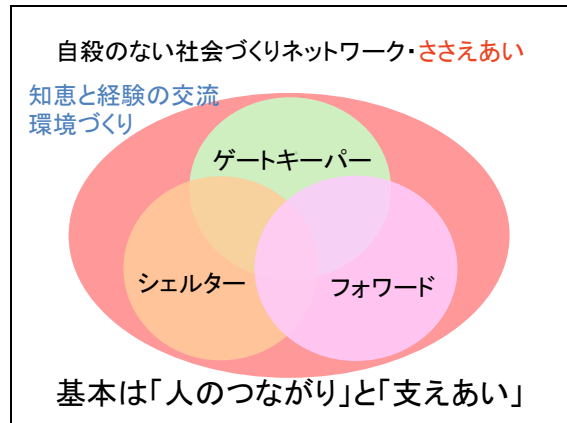
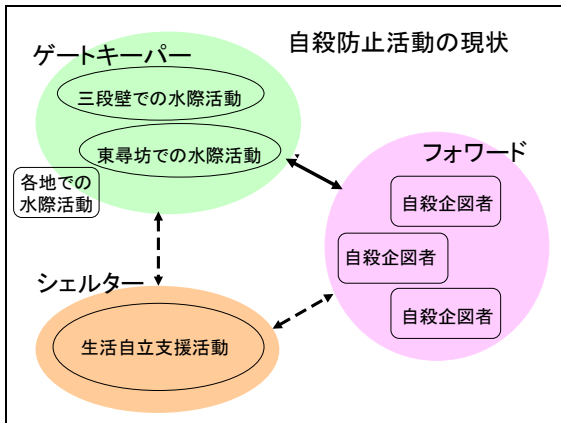
2009年10月24(土)
 日本財団
<http://sasaeai.org/>

背景

年間自殺者3万人超の社会

「暮らしの場」を見つめなおす

「支えあえる社会」をめざす



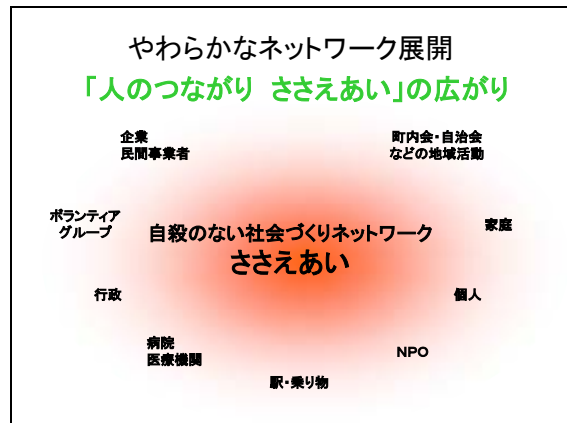
ミッション

人のつながりを広げる

ささえあいの関係を育む

それぞれができることをやっていく

自殺のない社会



今後の活動予定

- ▶ 現場視察と関係者の交流
- ▶ つどい(東尋坊、三段壁)
- ▶ シェルターネットワークづくり
- ▶ ネットワーク構想の情報発信と仲間づくり
- ▶ 参加者交流会

次回交流会<予定>
 日時: 2009年11月28日(土)午後1時~3時
 参加費: 500円
 お問い合わせおよび参加申し込みは事務局
sasaeai@gmail.com

それぞれができることに取り組みながら
 やわらかにつなぎながら
 だれもが気持ちよく暮らせる社会
 を育てていきたいと思えます

自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい

<主 催>

自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい

<後 援>

NPO法人心に響く文集・編集局

NPO法人白浜レスキューネットワーク

NPO法人自殺防止ネットワーク風

コミュニティケア活動支援センター

NPO法人全国自死遺族総合支援センター

NPO法人自殺対策支援センターライフリンク

一般社団法人日本いのちの電話連盟

内閣府

<協 賛>

ゴールドマン・サックス証券株式会社

自殺のない社会づくりネットワーク・ささえあい

代表：茂幸雄（NPO法人心に響く文集・編集局代表）

事務局長：福山なおみ（共立女子短期大学看護学科精神看護学教授）

<事務局>

〒113-0034

東京都文京区湯島 3-20-9-603

(株)コンセプトワークショップ内

メールアドレス：sasaeai@gmail.com